

平成24年度第2回朝日地域審議会

会議録（概要）

期日：平成24年8月1日（水）

場所：鶴岡市朝日庁舎 大会議室

平成24年度 第2回 朝日地域審議会 会議録

○日 時：平成24年8月1日（水） 午前9時30分から午前11時45分まで

○会 場：鶴岡市朝日庁舎 大会議室

○出席委員：敬称略・五十音順

安達幸恵、五十嵐大輔、井上時夫、上野博喜、小野寺一郎、工藤悦夫、今野継子、
齋藤源之助、佐藤泉三、佐藤正、佐藤照子、佐藤宥男、佐藤芳彌、難波玉美、
松本壽太、渡部巖、難波一之、

○欠席委員：敬称略・五十音順

大滝清策、宮崎康史、渡部小枝

○市側出席職員

【庁舎】朝日庁舎支所長、各課課長・主幹、室長 総務企画課職員

【本所】企画部次長、地域振興課職員

【教育委員会】教育部長、管理課主幹（学区再編対策室長）、学区再編対策室主査

〔欠席した3名を除く17名に辞令交付〕

1. 開 会

2. あいさつ 朝日庁舎鈴木支所長

3. 委員紹介並びに鶴岡市側出席者紹介

4. 会長・副会長の選出 事務局に一任され、会長に佐藤芳彌委員、副会長に佐藤照子委員を選出

5. 説 明

（1）学校適正配置について

（説明：教育委員会 山口教育部長、本間学区再編対策室主査）

○ 佐藤芳彌会長

学校適正配置の説明について質問を受ける。

○ 渡部巖委員

時代の要請でこういう形で進まざるを得ないと思うし、いろんな角度から考えても方向性として正しいのではないかと思うが、ただ、地域の合意を得るような形をとってほしい。何が不安かというと学校という子どもたちが通っている大きな文化的教育的施設がなくなるということは、どこの例を見ても地域の活性化が非常に損なわれるというのが実態だと思う。したがってその辺をカバーできるような、地域の活性化の拠点として生かして、地域の活性化につなげていけるような形をみんなで考えられないものかと思う。廃校になった学校を見ると非常にみすばらしく、地域住民の寄りどころとしていたものがあんな形になってしまうのかということが見受けられるので、地域の活性化も十分配慮した形で、地域住民のコンセンサスを十分得られるような形で進めてほしいと希望する。

○ 山口教育部長

十分に地域の皆様のご理解を得るということで取り組んでいきたい。7月3日の第2回検討委員会でもかなり慎重なご意見をいただいているので、これからさらに小学校区ごとの懇談会でも十分ご意見をお聞きして進めていきたい。

地域の活性化の関係は、跡地利用にもかかわるわけだが、これは教育委員会だけでできることではないので、当然市全体として庁舎庁内一体となってこの地域振興に支援していきたいと考えている。地域振興の拠点となる公民館の活動も見直しを進めているところだが、これについてもこれまで以上に社会教育以外の防災・福祉といった多分野にわたった機能を持った地域の総合拠点として整備していきたいと考えているので、ご理解をお願いしたい。

○ 五十嵐大輔委員

学級数と児童数の推移を見ると、統合する予定の学校の児童数が5年間ほとんど減っておらず、むしろ増えている学校もあるように感じた。逆に合計では約700人減っているが、大きい学校のほうで減っていると感じた。この5年間だけでは見えないと思うが、この5年の間に空き家対策とかで人口を増やして、各学校で10人とか20人くらい生徒を増やすような取り組みも視野に入れて動いてほしいと思う。今、自分たちの世代も仕事がないからと町のほうに出て行っているが、地元に残ってがんばって仕事をしている人たちもいるので、そういった人たちが、学校がなくなってやっぱり町にどンドン出て行っていってしまう可能性があるので、このまま引き続き学校を残すような取り組みを一緒にやってもらえたらと思った。

○ 佐藤芳彌会長

広い視点から、もっと子どもを増やして学校を残すという前向きな提言だったが、教育委員会関係だけでなく総合的な取り組みになると思う。

○ 鈴木支所長

学校だけではなく、少子化については、なかなか結婚しない、できない人が多いということもあって、以前は市役所でも結婚相談員を置いて婚活の支援をしたこともあったが、それは行政でそこまでやらなくてもいいのではないかという声もあり、ここしばらくは取り組んでいなかった。子どもがどンドン減るのは全体の人口が減っていることもあるが、結婚しないことのもひとつの原因として、少し違った観点から婚活を支援してみたらどうかと、地域審議会のテーマの中に婚活を取り上げて仕掛ける地域もあり、全地域に波及させて人口を増やしてもらう取り組みを継続してやっている。

就労場所の関係でも、産業の振興として工業団地の誘致もさかんになり、先端的な技術を持っている大学の研究所もあるので、何とか雇用に結びつけようとさまざま試行錯誤しながら取り組んでいるのが現状だ。皆さんからアイデアをいただいて、審議会を通して取り組んでいくのもひとつの方法だと思う。大事なことなので、これからも継続してやっていかなければならないと思っている。

○ 佐藤芳彌会長

支所長から総合的に答えてもらったが、全体の企画の立場から。

○ 三浦企画部次長

大変素晴らしい意見だと思う。そういった意見が各地で出ているだろうと思う。支所長から話があったが、全体的に人口が減っている、すべて右肩が下がり始めている。婚活の問題もあるだろうし、

雇用の問題もある。少子高齢化と一言で括られているが、この問題に鶴岡市が正面から取り組んでいるかという、はっきり言って積極的に展開しているとは言えない。婚活ひとつについても昨年あたりからようやく本腰を入れるということで企画部を中心に取り組んでいるが、今後定住化対策、あるいは雇用対策といったそういった総合的な施策を本気でやっていかないと大変なことになるんだろうというところでは共通の認識にしているのではないかと考えている。学校適正配置の問題についても、鶴岡市としては複式学級の解消をしたいという観点から進めているが、過疎対策の面からは最後の砦を奪われるのではないかと意見も多々あるだろうと思う。各地で懇談会を通していろんな意見が集約されているが、そういった意見は忌憚なく出していただきたいと思っている。今後また生徒の数が回復しないとも限らないので、希望を捨てることなくいろんな議論を深めていただきたい。これによって有効な施策がないなかで、どういった手を打ったらいいかと全庁的に検討中なので、こういった審議会を通してさまざまなご意見をいただければと思っている。

○ 佐藤芳彌会長

学校再編もそうだが、総合的な対策をしていかないと方向付けができないと思うので、この審議会でも話し合われるテーマ協議でも、よろしくお願ひしたい。

6. 協 議

(1) 地域審議会協議テーマについて

○ 佐藤芳彌会長

6の協議に入ります。

今までいろいろな地域課題を捕らえながら話をしてきたが、この第4次地域審議会が最後の2年間になる。この審議会のテーマ活動について、この会議の方向をどのような形で設定していくかということで、今日はその方向性に向けての柱づくりに時間をとりたい。

まずは事務局から説明してください。

(事務局説明)

○ 佐藤芳彌会長

これからのこの地域審議会の検討協議するテーマの核となる考え方について説明をいただいた。それぞれの立場で今の課題について話してもらい、その中から事務局の方向性を踏まえながらサブテーマを設定していきたい。

○ 佐藤正委員

住み続けることのできる地域づくりということで、私はいかにこの地に長く住めるかと思っていて提言もしているわけだが、そんな悠長な話でなくて即、具体化できるようなものでないと間に合わないと思っている。

合併しても私は特別、行政に期待するものはなかったが、ただ負担は増えるのは非常に困ると思っていて、たとえば税金や公共料金はすべて平準化され、かなりの負担増になったが、その一方で社会福祉協議会の会費は、いまだに旧市の三倍を払っていることは逆行していると思っている。いろんな行政側の話を聞いても、地域振興懇談会などでも、いわゆる周辺地域のフォローをどのようにして考えているのかということは全く見えなかった。行革を大義としてどんどん合理化は進められている。

一方でフォローは全然進まないという状況なので、片方で保育園も、もしかしたら小学校もなくなるという状況の中では全くお先真っ暗で、所得は増えないで負担は増えるとなると、負担を抑制するような昔に、戻れるだけ戻るしかないのかと思っている。ぜひ少しでも長く住み続けられる、住める、そんな地域を具体的なものを考えたいと思う。

○ 上野博喜委員

自治会で今、抱えている集落再編のサブテーマも考えているが、集落を維持存続させるということについて、コミュニティ構想・構築については、非常に興味がある。当自治会では何が必要だろうかということで、産業特に農業を活性化しようと、集落営農なり、集落に住みついてもらうような、今後長く住みつくような対策を、今のわれわれの時代で築けないかと考えているので、これからいろいろ協議の内容テーマ等について勉強したい。

○ 松本壽太委員

佐藤正委員から即効性のある施策などがとても重要であるという意見があったが、同時に不易の部分、長期スパンできちんと将来を見据えたことが必要なのではないかと思っている。教育から大切な部分から外れてしまっているのではないかと思う。

昔、いっぱい金儲けをしろなどという教育をした親はないと思うが、人に迷惑をかけないで生きろとか、もし今の世の中にちょっと伝わっているとすれば、犯罪だとかいろいろな凶悪事件だとかがない世の中になっているかも知れないと思う。

それから、いわゆる学区編成、学校編成とかいろいろな問題、集落維持だとかあるわけだが、これも、昔は家単位で全てをやってきたということが、特にこの農村地域であったが、今は家自体が崩壊しているという形で、家の必要なことを全部下請けに出している。たとえば雪囲いだとか雪掘りだとか、畑だとか田んぼだとか、そういうことを全部自分の家でやってこそ成り立ってきた。それができるためには家族構成とかがちゃんとしてなければならなかったし、また、子どもの教育もちゃんとしていなければならなかった。そういうことが大切なことであって、それが忘れ去られてしまっているのではないかと思っている。そういうことを突き詰めていくと、この旧朝日村地域で悩み続けてきた過疎対策ということも、きちんと背景にあっている、コミュニティをどうするだとか、今の問題も平行して過疎の対策というものを考えていかなければならないという気がする。

今まで過疎対策イコールハードに力を入れて、お金をどんどん使ってきたが、それにとまなうソフトというものが全然置き去りにされてきてしまっていて、マスコミだとか映像だとかニュースとか非常にいいものばかりを見ていて、そればかりを追いかけてきた実態があるのではないか。

下請けに出さないような家庭づくり、下請けに出さなくてもいいような地域づくりというのが必要なのではないかと思う。

例えば、この地域には災害に対応する、もしくはそれを復旧する力がない地域がでてきている現実がある。それだって、若い者がみんな大学に行って公務員だとか大企業ばかりを目指しているが、堂々と汗出して、地域を守るといってもとてもいい仕事で、農業なんかはそのベーシックな部分なのではないかなという気がする。本当にこの日本の職業には規制はないわけなので、そのあたりの教育というのも小さい頃からきちんとしてもらえればありがたいと思う。

離れ小島の一軒家で商工業活動して、大繁盛していますなどということはある得ないわけで、やはり、人口減に対抗するというか、また、全国でもそういう「減らない地域だなあ」というところがあればぜひ教えてもらいたい。コンビニの例を見ても、新宿駅前の小さいところになんでレジが5台もあるのか、一日70万人乗り降りする地域もあれば、この地域みたいに1時間に1回クルマが通るか

という場所で商売をしている人もいる現実もあるので、やっぱり過疎対策、今いい社会なのかということも問題だ。

○ 齋藤源之助委員

テーマが住み続ける地域づくりということだが、ある人から何でこんなところに住んでいるのかというと、土地というしがらみがあるからで、農地がなかったら住み続けなくて出て行く、と言われた。やはり集落を維持する、住み続ける地域をつくるというのは農業、土地というのが一番の要だと思っている。朝日には集落営農組織が六つあるが、まだ共同という意識だけで儲けるところに結びついていないので、先般法人化に向けた話し合いをした。そのなかで、地域の人も大事にする、コミュニティを大事にする、自分だけ儲かってもどうしようもないし、集落が維持できなければ住んでいる意味もないという意見もあった。それは重要なことで、農協でも、農協で出資してそういう集落は守るといふ、例えば、水の管理となると地域をまたいでいくので、片方で集落営農、法人化してやっていると、みんな水利を守ってくださいとは言えなくなってしまうと、そのようなことも含めて農協が出資法人になって法人化に立ち向かったほうがスムーズに行くと感じた。

朝日の場合は山の恵みを生かした産業で加工販売に取り組み、また、最近流行している体験型、体験ツアー的な方向に向けて農業ビジネスを進めていく方法が、これからも必要なのではないかと考えている。

○ 佐藤泉三委員

人口の減っているところ、日本全国だいたい同じことを考えているのではないかと感じている。人口減少になれば空き家が増え、新築する人も少なくなる。新築する人が少なくなれば当然、木材も売れなくなる。これは日本全体の問題でもあるが、どうしたらよいかと考えると、やはり世界に目を向けていく、外国に木材を売っていかなければならないのではないかと。農産物も外国に売っていかなければならないのではないかと思っている。そのために我々は一生懸命勉強しなければならないし、市の力だけでなく県の機関、国の機関も利用して、もっとどうしたらよいか知恵を絞っていきたい。

また、先ほど学校のことがでたが、私が子どもの頃、本郷小学校だけで800人の生徒がいたので、今朝日全体で百何人という数字を見てびっくりした。生徒が少なくなれば統合するのもやむを得ないが、大都会は人口が増えて学校を新しく造っているところもあるので、朝日も希望を捨てることなく、人口を増やし産業を復活させて学校を復活させるという気概を持ってやっていきたいと思っている。

○ 難波玉美委員

鳥獣被害防止対策の支援拡充が取り上げられているが、農家にとっては作物被害によって収入が減収したり、生産意欲がなくなったりそのようなことが多い。もう砂川から大針のほうはクマかサルが人口よりも多くなっている感じがして、それでも私たちは農家なので、野菜を作ったりしているが、ほんとにサルに負けてしまうので、鳥獣被害の防止対策として支援の拡充をお願いする。

○ 佐藤宥男委員

先日、婚活支援の講演会に行ったが、三瀬地区でやっている運動、松ヶ丘で陶芸を通しての婚活企画、松根地区の婚活の運動と、三つの事例が発表された。パンフレットを見ると対象者の年齢が20歳から49歳と上限を設けているが、例えば50歳の人だめなのか、あえて上限を設ける必要があるのかどうかということ思った。

講演では、とにかくいろんなイベントをやっても、ゴキブリじゃないんだからすぐ雄と雌を放せば

子どもができるんだという発想はやめてください。いろんなところに婚活のイベントに参加してもそこで何かその地域の特産でもいいし食べ物でもいいし、あるいは結婚に結びつかなくても同性の友達でもいいし、何かを得る機会にできれば、何組カップルが成立したとかそういった数字を誇らしげに語るのはいかがなものかなと話していた。

また、どうして結婚しないのかというのは必要性がないから、ということでパラサイトシングルとして親のもとで暮らすことで、結婚しなくても住みやすい時代になってきたことが原因ではないか。コンビニなどで何の不自由もなしに生活できるというのが、結果的には悪影響を与えているのではないかとということも話していた。

ひとつ私も知らなかったことだが、日本はよく高齢化社会だと言われるが、高齢化率が21%以上になると超がつき、単なる高齢社会とは意味が違う、正確には超高齢社会だということだった。

○ 五十嵐大輔委員

新規就農して3年目になって、まちづくり塾にも参加させてもらっているが、若い人が具体的に地域のことに取り組む人がすごく少ないと感じる。委員公募に応募した時、小中学校や高校生に審議会をもっと傍聴させて感想文を書かせたり、それに対してのフィールドワークとかいろいろなことをさせて、自分自身をもっと具体的に地域にどんな問題があるかということをもっと小中学校の頃から感じてもらわないと、2、30年後にいざ、まちづくりにかかわったときに具体的に活動できる人が少なくなるのではないかと聞いた。仕事もみんな町の方にどんどん行ってしまっているの、消防団でも10人くらい集まっても地元で働いている人が1人とか2人しかいなくて、火事になっても1人か2人しか来れないのでは、せっかく消防団があっても意味がないし、地元に対しての意識が今すごく弱くなっていると思う。自分としては朝日自体での収入源を作るための仕事をもっと作ったりしないと、地元に対しての意識というのがすごく弱くなるのかなと感じている。

先ほど佐藤正さんが言っていた、即具体化できるようなことに関して、地元の飲食店経営者が主催して庄内コンというイベントが最近、鶴岡市の銀座通りで行なわれたが、婚活イベントは民間でやっていることに対して行政がちょっとだけ応援してあげるとすごくスピード感があるイベントを発信することができると思う。グリーンツーリズムの農家民宿とかも基本は民間で、それに対してちょっとした補助だけするという形にすると、すごくスピード感のあることが取り組めるので、もっと地元の若い人が主体となって行われることが増えるように、すべての取り組みの目線を見直してほしいと感じる。

自分も農業をしていて、鳥獣被害だとか売り上げがどうこうとかすごく感じるが、鳥獣被害も目先の防護も大切だが、もっと杉林を減らして鳥獣のえさとなるものをもっと増やして、山から下りられないようにしたらどうかとか、売り上げを伸ばすにあたって、同じところにばかり出すとか、どうしても営業がなかなかできないので売り先を定められなくて売り上げを伸ばせない人もいっぱいいるようなので、もっと販路を広げるような対策に取り組んでもらえると、若い人から年配の方まで収入を上げやすくなると感じた。

まちづくり塾では、六十里越街道でトレイルラン教室を行い、県外からも人を呼びこもうという取り組みをしているが、規模を大きくしようと思うとすごくボランティアが必要で、自分たち10人くらいのまちづくり塾ではなかなか大きくできないので、このようなときは逆に地域の年配の方々にもっとたくさん協力してもらい、大会を大きくするための応援をしてもらえたらいいと感じている。

若い人がたくさん参加できるような取り組みを、もっといっぱいできるように自分もがんばっていききたい。

○ 今野継子委員

私はやっぱり行政の人たちにがんばってもらわないと、農業も商業もあるが、住民と一緒にがんばらないと何もできないと思っている。行政にだいたい期待もしているし、かといって頼りきりではなく自分たちで何かをしていかななくてはならないと常々思っている。特に観光協会を持って思うのは、合併になって鶴岡市になったが、朝日は何が特徴だったのか、もう一度みなさんから考えてほしい。教育委員会では複式学級はだめだと結論付けているが、うちの子も皆さんの家の人たちも複式で育ちながら今、成人になって結婚して子どもを産んでいると思うし、山村なので給食に山のものを食べたり、おばあちゃんと採りに行ったり、そうやって育ったと思う。そういった文化も合併になって、統合になって仕方ないことはあるが、そういったものは大切に残しながら、これからを進めてもらいたい。特に今、観光は大変厳しいが、皆さん里山の文化とか昔のものに癒しを求めてやってくる人がたくさんいる。荒れた山、田畑がいっぱいあるが、山を守ったり田んぼを守ったりして、森林文化都市と言うが、ただ建物を建てるそれから観光誘致するだけでなく、そういった部分を守ってもらって、朝日という部分を出してもらえたらと思う。私たちも観光協会、3セクの部分でがんばっていきたいと思っている。特に行政の方は自分の担当だけだと思うが、いろんなことに関わってもらい、やっぱり朝日が好きだという気持ちで仕事をしてもらいたい。みんなサラリーマン化しているところが、学校の先生にも言えるし、合併した商工会、出羽森林組合、JA庄内たがわの職員も、地域のことが分からないからと過ごしてしまうことで、私たちにとっては住みにくい朝日地域になっているのかなと思うので、まずは企業の方々から、本当に朝日を知っていただいて好きになってもらえたらと思う。

○ 安達幸恵委員

食生活改善推進員の一人として、生活習慣予防や保育園に行って食育活動、その他いろいろなことをやっている。

今年度の目標は、野菜をしっかりとりましょうということで、この間も私たちの研修会があった。今、たくさん採れている野菜を主にして研修をした。減塩や習慣予防について、今がんばっている若いお母さんたちに伝えていきたいと願っているが、なかなか忙しくて、呼びかけても集まって一緒に料理の勉強をすることができないことが課題と思っている。

以前、ほかのところで暮らしていたときの思い出だが、ある大きなデパートに民田茄子の漬物が小さな袋に10個くらい入って高額な値段で一番いいところに並んでいた。山形県の民田茄子が一行に、箱詰めされてさくらんぼのようにきれいに並んでいた。それを見たときに山形の、庄内それから朝日の美しい風景がよみがえってきた。子どもたちにもどこに行ってもそんな思い出がよみがえるような食文化を伝えていきたいと思っている。

○ 工藤悦夫委員

住み続けることのできる地域づくりというテーマだが、自治会費や自治会活動などの相談対応について、これからの会議で協議していただければ大変ありがたい。

○ 井上時夫委員

私が中学校を卒業した頃、大網田麦俣で170、80軒あった戸数が、現在は110軒ぐらいになっている。七五三掛をさておいても、40数年で減っている。当時は集落でいろいろな行事があって、最後に懇親会をすると歌ったり踊ったり和やかにすごしたが、今はたんたんと酒を飲んで、きりよく別れるようになっている。

前は田んぼで父ちゃん母ちゃんが仕事をしていたが、機械化で朝夕だけでできるようになったこと

で仕事を持つようになった。しかし、その機械を購入するために、さらに朝早くから夜遅くまで他の仕事をしている人が多くある。以前は田植えが遅れると親戚が手伝いに来てくれたが、今は自分が会社に行っているため手伝いもできないので、その家だけでやれなくなると田んぼをやめて、土地は荒れていく。今、中山間の直接支払いなどで草刈はやっているが、条件の悪いところは耕していない。だんだん荒れ放題というか、草を刈るばかりで耕作地としては認められない農地がかなりある。このようにみんな、せがれに農業をしてくれとはなかなか言えない。そうするとみんな、会社勤めで家には寝に帰るぐらいだということを話している。仕事自体も夜勤もあるので、いろいろな行事を教えるにも大変だ。これからこの朝日に住み続けるためにいい方法がないかということで、集落でいろいろなことでコミュニケーションを図りながら、そこから何とか次のステップにいけることを見出していくように話をしているが、このテーマでいい案が見つけたらと思っている。

○ 難波一之委員

子どもたちの地域の中における立場や位置づけというものが、どのようになっているのか。行事も少なく、地域の行事に子どもたちがみんなに参加する機会もあまりないように思う。その地域の中にどんな資源があるのか、どんな文化があるのかを知らないで将来ここに住み続けていけない。小さいときからの記憶というものが楽しければ楽しいほどその地域に住みたいと思うようになると思う。

今、学校でも地域のことを教えるが、合併してからは鶴岡市全体を見た地域のことを勉強するわけで、朝日のことだけでもない。地域の行事とかそういったことに参加して地域の人とふれ合いながら覚えていくのが一番いいと思っている。学校のほうも今年から学習要領が変わって、教科が優先されて地域とのつながりの部分が縮小されている状況にあるので、地域の方々をお願いする部分も出てくると思っている。そういったことが活性化にもつながるし、将来的な定住したいという気持ちに結びつく。親が雪はいやなものと言っていると、雪はいやなもの子どもの頭にも入ってしまうと思うので、雪に対しても楽しいことをみんなで考えて、子どもたちが、雪はすごいんだ、と言えるようにしていける仕組みづくりも必要になってくると思う。

○ 小野寺一郎委員

子どもたちが少なくなってきたが、学区再編も含めて地域の中では小学校というのは大切なものと思っているので、これからの学区再編も含めて地域と子どもたちのあり方も考えていく必要があるのではないかなと思う。

近年、山が非常に荒れている。暑いさなか下刈りをして、大変な思いをして育ててきた山が荒れているという状態なので、サルクマ対策も大事だが、林業の活性化にも取り組んでもらいたい。

今は自分の家の持山の境界が分からない状態で、ましてや子どもや孫の代になると、まったく持山自体も境界もまったく分からなくなる。そんな形で育っていくのかと思うと、残念な気持ちでいっぱい。山が大部分のこの地域で土地離れをしたら、何もこんな不便な場所に住む理由もなくなるわけなので、なんとしてでも地域が踏ん張って生きていけるような対策を、私たち高齢者も含めて考えていかなければいけない。具体的には、特産としてきのこ等もあるわけだが、燃料も含めてペレットストーブが大変いいと思っている。木材はいくらでもあるので、素人考えだがペレット工場などを始めてみてはどんなものかと思っている。

○ 渡部巖委員

つい最近、わが風土ということで原稿を依頼されて、朝日村をどんな形で紹介しようか悩んだ。かつては自然が豊かで水がきれいで、しかも温かい人情、絆がある、ほかの都会にはない財産である。

そして四季織り成す豊かな自然の姿はまさに他にはない誇れるものであると、いつも書いていたのだが、なぜかそのことを書けなかった。それで、昔の資料を紐解いてみたら、昭和61年の朝日村総合計画、「歴史と未来が会う村、あさひ」というものがあって、それをめくってみた。そのなかに目指す朝日村の将来像、将来の姿と構想図という大テーマがあり、そのなかの将来の姿というところを紹介したい。「朝日村は将来にわたっても雪国山村であることには変わりはありません。これまで村民意識はどちらかというと雪国山村であることを否定し、都会に向け顔を固定させてきた過程があったように思われる。しかしながら、世の中の風潮が物の豊かさから心の豊かさ重視、素朴な自然を求める傾向に移行しつつある現在、美しい自然の宝庫である本村には無限の可能性が秘められており、まさに21世紀は朝日村の時代といえます。私たち村民一人ひとりが、都会にない村のよさを知り夢と誇りを持って本物の質の高い朝日村らしい暮らしと温かいふれあいの住みよい地域をつくっていくことが大切です。すなわち、都市住民がうらやむ新しい山村生活文化の創造を目標としながら、村の将来の姿として村民一人ひとりが生涯幸せに暮らせる村、いい村に住んでいますね、といわれるような村を目指します」、ということを書いている。これは今も昔も私は変わっていないと思う。具体的な一つ一つの施策がたくさん出ていて、そのなかに例えば村づくりの合言葉を作ろうではないかということもあり、四季折々の美しい自然と、おいしい食べ物に恵まれ、自然の恵みを生かした質の高い暮らしと産業を作り出し、幸せな生活を送れるのだ、と言っている。合併して7年なるが、いつまでも行政頼りではなくて、自分でできる自助の部分と、公からやってもらう公助の部分と、お互いに協力し合ってやっていく扶助の部分とその三つをお互い力を合わせてやっていかなければならないと思う。そして健康な村、安全な村、生きがいのある村ということになると思うが、自助・公助・扶助の部分で、どうしても馴染んでいけない人が村を出て行くのだろうと思う。そうならないように、地域の一人、組織の一人として活性化につなげていけるような地域をどうつくっていくか、どう環境づくりをしていくかということが大事だと思う。

また、健康福祉もちろん大事だが、何を核にしていくかと、やはり人づくりだと思う。学校教育はもちろん、どう地域がかかわっていくかということでの公民館活動、生涯にわたって学びあう、学ぶことの楽しさを知る、そういう機会をつくって助長していくのが公民館活動だろうと思う。公民館活動が地域の人と人を結び、地域の文化を高め、地域の活性化につながっていくと思う。そうして郷土愛が育まれていくのではないかと思う。

しかしながら、鶴岡市一円で同じものが同じようにできるわけではなく、朝日では雪は避けて通れない課題であるし、この山村で散在している住宅のことを考えても、例えば消火栓ボックスだが、朝日と鶴岡では1戸あたりの負担が相当違う。同じような例が水道にしても下水道にしてもそのほか道路にしても、地域特性があって避けては通れない部分があるわけなので、そこを理解してもらって、ここならではの行政施策をやっていかないと、これからの地域の中で個人も地域もがんばらなければならないが、自分たちだけでやれと言われてもできないこともあると思っている。

公民館活動も停滞しており、防災も福祉もあるが、何を核にして地域を守り地域と人の絆を深めていくかということを考えているときに、私はこれからの中ではコミュニティ活動だろうと、いわゆる公民館の学びを通じた活動ではないかと思う。

朝日音頭は朝日全体の地域の風土人柄そのものを全部包含した形でよく表しておりとてもいい唄だが、何かシンボルテーマ的なものを復活しながら、みんなで活力を盛り上げていくようなことも話題にしてもらえるとありがたい。

○ 佐藤芳彌会長

最後に渡部さんから、かつて朝日村時代に作った将来の朝日というテーマにまとめていただいた。

最終的にはそこに住む人づくりであり、住む人がこの地域に住み続けてがんばっていききたいという、思いを感じた。

それぞれの立場で意見をいただいて、貴重な意見もいっぱいあった。特にそれぞれの意見の中に朝日の地域が好きでここに住み続けていきたいという思いがいっぱいこもっていたと思うし、それはいろいろな人が協力していかないとできないことであり、その思いをこの委員の中で共有できたということが一番の成果だったと思う。

メインテーマは住み続けたい地域づくりとして、サブテーマについては、ここでまた具体的に絞るというのは残された時間で大変だと思うので、会長と副会長と事務局に任せてもらいたいと思う。それぞれの中で貴重な意見が出され、基本的には時代は進歩して、合併して新しい時代になったわけだが、時代が変わっても変えてはならない大事なものはしっかり捉えていく、その大事なものはこの朝日の地域には自然を含めて人情も含めていっぱいあるという、そのベースとなる部分を確認できたのではないかと思う。

もうひとつは、住民と行政と一体となってやっていかなければいけない部分がいっぱいある。自分でできる部分、行政が対応する部分、その辺を確認しながら、そのためには我々はここに住み続けたいという思いと、行政が朝日の地域を何とかしたいという、その思いがひとつになったときに大きな力を発揮できるのではないかと思う。

そのためにも、この会議の堅苦しいやり取りだけではだめだと思うので、前回は議会傍聴をしながら終わった後に庁舎課長も含めて懇親の場を開いたが、そのような自主的な活動も設定しながら、与えられた審議会だけではなく、自分たちでつくる、集まる審議会にしていけたらと考えている。

サブテーマは一任してもらってよいか。

○ 各委員
異議なし

○ 佐藤芳彌会長

では、一任させてもらって、まとめながら次回につなげていきたいと思う。

(2) その他について、全体を通してでも、また審議会に関係ないいろんな今の状況とか課題でも。

○ 渡部巖委員

一点だけ、前回の提言書が配布されているが、このなかで、例えば従来と違ったことが提言され、それが行政の中でどう反映されたのか、あるいは反映されなくてもどういう理由でどうなったとかということを次回知りたいと思う。

○ 佐藤芳彌会長

では、提言されたことがどう行政に伝わって、予算も含めて反映されているのか、具体的に整理をして提出をお願いしたい。

ただ、提言したとき各審議会長が説明したが、市長と意見の交換する時間が取れなかった。市長がここで参加して我々の意見を聞くということが、信頼関係を持つ大前提になるので、ぜひ出席してほしいということも、機会があったら伝えたいと思う。

7 その他 (特になし)

8 閉 会